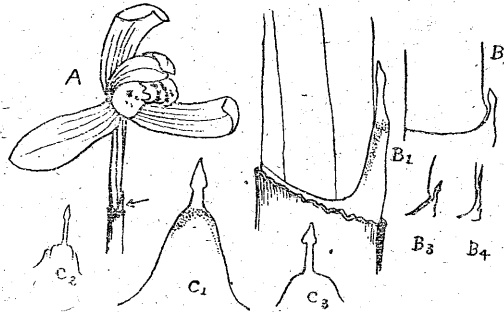


Ipomoea 屬から區別される。我々が花を得られなかつたのは上記の通り、花期がおそく其頃日本では霜になるためと思はれる。この草も一夏だけ歸化したことになる。

○シュンランの花序について (津山 尙) (Takasi TUYAMA: On the inflorescence of *Cymbidium virescens* etc.)

シュンランの花は花序の先端に單生しているように見えるが、よく見ると花序の最も上部に位置する鱗片状の苞の基部に附圖のような、長さ 2—3.5 mm ばかりの痕跡的な花序の先端があるのに気が付く。これによつて單生的に見える花は實は同屬の他種の植物に普通見る所の總狀花序の最下の 1 花が發達したものであることが判り、又本來ならばシュンランも正常な總狀花序を有したものであることが想像される。所が總狀花序を有する同屬の他種に於ては、他の多くのラン科植物の花に於て見られるように、子房が(或は時に花梗と共に) 180° 捻轉して、本來ならば花莖の軸の方に向うべき唇瓣が、反轉して花を受ける苞の上を越えて外方に向つてゐるのである。この廻轉は唇瓣が昆虫の受粉又は吸蜜行動を對象

として進化したと言う考え
方からすればさぶる合理的
に出來ているし、事實そ
うした唇瓣を有するラン科
植物に子房の捻轉が起らな
かつた場合には、唇瓣の展
開が花莖軸又は相隣他の
花の花部器官につき當つて
充分に出來ず、受粉を全う
することが出來ないであら
う。所がシュンランに於て
は子房が捻轉せず、従つて



A. シュンランの花序一苞を取り去つて、退化した花序軸の先端を示す。B₁—4 退化花序軸の側面觀。C₁—3 同上の背面觀。(倍率は各種、點描部は紫斑部を示す)

花はそれを受ける苞を背にして花序軸の方に向つてゐる。しかしこの場合は花序軸が退化して、單一花になつてゐるのであるから、上に述べ障害は起らないわけである。本來單一花を有するトキソウ、アツモリソウ、クマガイソウ、ホテイラン、サワラン等でも同様の理由によつて捻轉が起つてゐない。正常の總狀花序を有するラン科植物で捻轉が起つてゐない例は日本産のものではクモラン、ヒメノヤガラ等特殊なものに見られる。かかるものでは唇瓣の廣がりや花梗に子房を加えたものの長さとの關係において上に述べた障害が起らないものに限られてゐるし、又昆虫との關係においてもその位置において何等無理がない様に發達してゐるものであらう。シュンランに於ては栽培家が珍重する所の双頭花なるものがあつて、花序軸上の最下の 2 花が互に著しく接近した位置

に於て發達したものがあつた。ここに於ては上記の障害が起らぬ様に子房が適當に捻轉している。しかし單一花を有するシュンランに於ても實はその捻轉が全く起らぬかと言うに、さうでなく、普通 45° 位は左又は右に捻れている場合が多い。この場合いかなる場合に左に或は右に捻れるかの問題が残るが、これは他の場合にゆずる。捻轉するラン科植物の凡ての場合、蕾の時にはそれが起つて居らず、満開時に到つて初めてそれが完成するのであるが、シュスラン屬 (*Zeuxine*) 等では果實となるに従つてそれが、再び捻れ戻つて花本來の正常位置に來る。これは果實の裂開を促進する効果があるように想像される。追記：久内清孝氏から伺つた所によると1花序軸の上に互にかなり隔つて3個の花が發達したシュンランの1例を見たことがある由である。

○植物のおしば標本を半日で作る方法 (前川文夫) (Fumio MAEKAWA:
A method of preparing dried specimens in half a day.)

ササ、ハギ、モミジなどの普通の厚さの葉のものであるならば、そして夏の頃夜間でも気温 20 度を下らぬ頃ならば、午前中に採集したものを午後の半日の手数だけでできる標本にすることが出来る。準備としては厚手の吸収紙もちろん結構だがそれがなくても平氣である。代用として新聞紙(この頃の表裏2頁のものを4枚分重ねて2つに折る。つまり8枚に折りたゝんでホツチキスでとじると具合がよい)をつかつて吸収用紙をつくる。これを日光にあてて熱く焼けたのを使う。日に焼けて狐色になつても、私の経験では十數年使つてちつともさしつかえがない。植物を挟むのは別に1頁大の新聞紙を使う。この兩者をかわり番に重ねるのだが、その時に折りたゝみの折目を吸収用紙のは左、植物をはさんだ新聞紙のそれは右という風にしておくとな率がよい。

この筆法で標本を作るのであるが1例をあげると、

某日(晴)午後3時ごろから時々曇る。

2.00 時 日光に乾かしてあつた吸収用紙を使用して採集して來た植物を間に入れた新聞紙をはさみ、金網の野冊にはさむ。それをアイゼンバンドのバンドを利用してかなり強くしめる。金網がなければ板ではさんで重しをのせてもよい。このときは2頁目位の重さがよい。

3.00 時 第一回吸収用紙のとりかへ、吸収用紙は水を含んでべたべたである。とりかへ用の吸収用紙は別に前と同じく日光にあてて焼けてあつくたつてゐるのを使う。植物をはさんだ新聞紙はそのまゝで決してとりかへない。注意して開いて中の植物の姿勢を直すのはよいが、この紙をとりかへることは時間と勞力とを無駄にし、その上、標本の形を崩すだけで大した効果がない。

3.40 時 第二回のとりかへ、準備と注意とは前に同じ。

このまゝ翌日の朝まで置いて、朝開いてみると吸収用紙にはまだ暖か味が残つて多少の濕氣はあるが、植物をはさんだ新聞紙と中の植物とは乾いている。葉色や花の色は冴